

しろくて ちいさな 波の名は

PIKOZO 著

しろくてちいさな波の名は

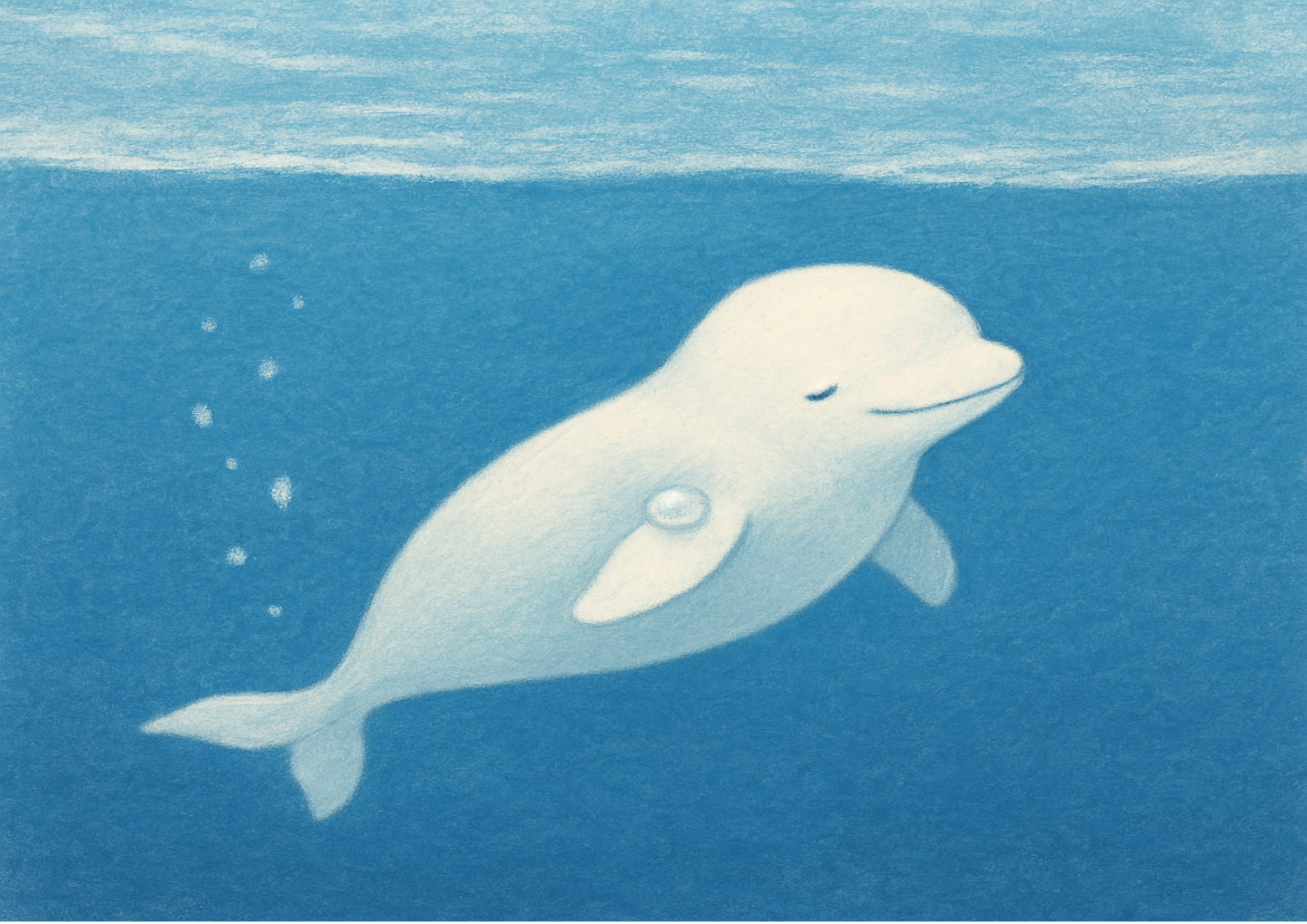
並

(卒目)



しろくて ちいさな クジラが
うまれて すぐに うみにでた。

なまえも まだ もってない、
ひとりぼっちの たびのはじまり。



クジラの ひれには

キラリと ひかる ちいさな あわ。

「これ、なんだろう？」

クジラは ふしぎに おもいました。

すれちがう うみの ともだちが

「きれいだね」と くちをそろえて いったけど、

だれも それが なんなのか、

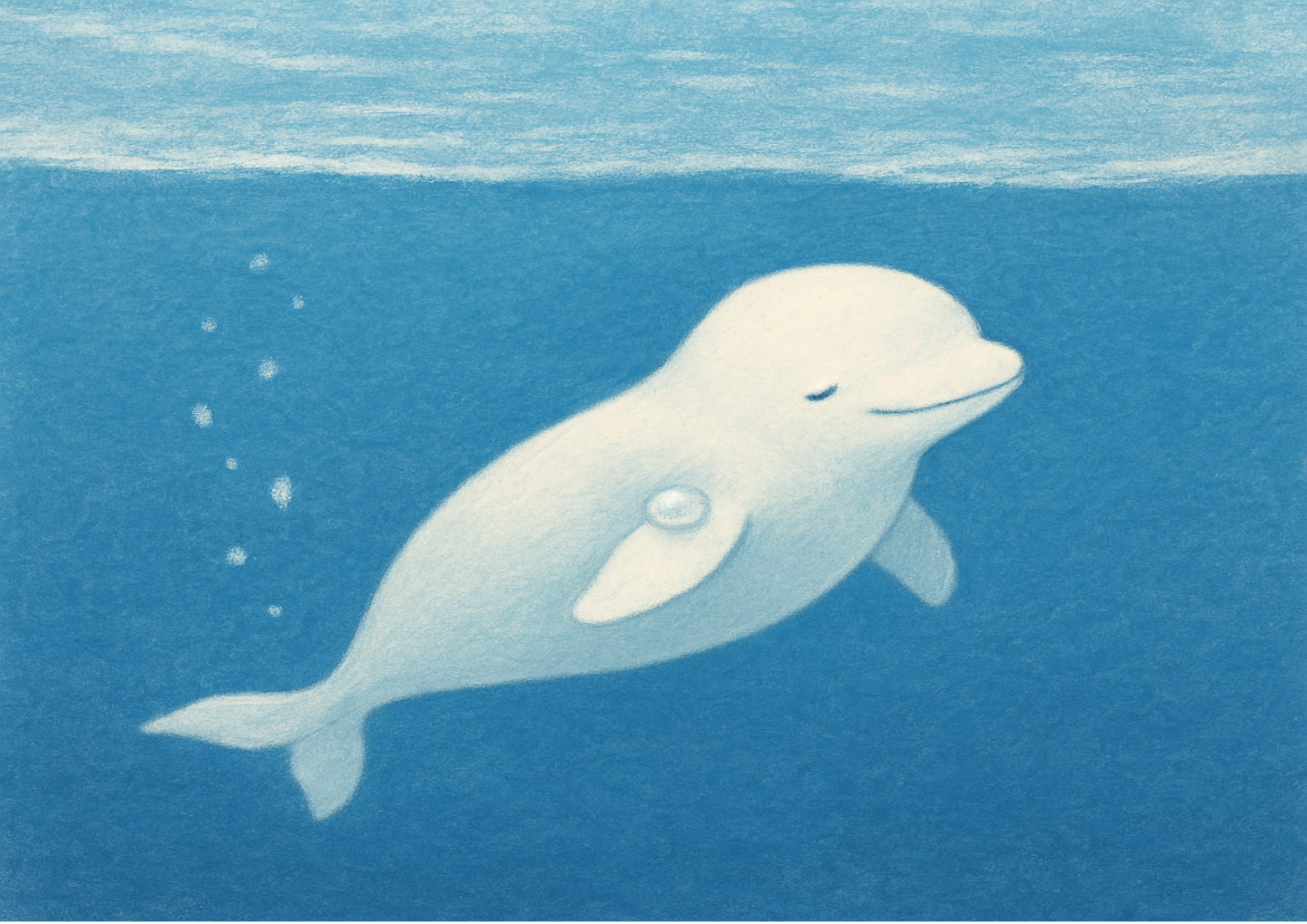
しりませんでした。

クジラは そのあわを

おおきな イカに わたしました。

イカは かわりに、

ピカピカの ひかる インクを くれました。



そのインクを かなしい さかなに あげると
さかなは うたえるように なりました。

そして うたを クジラに くれました。

うたは サンゴに とどいて、
サンゴは ポロポロと なみだを こぼしました。

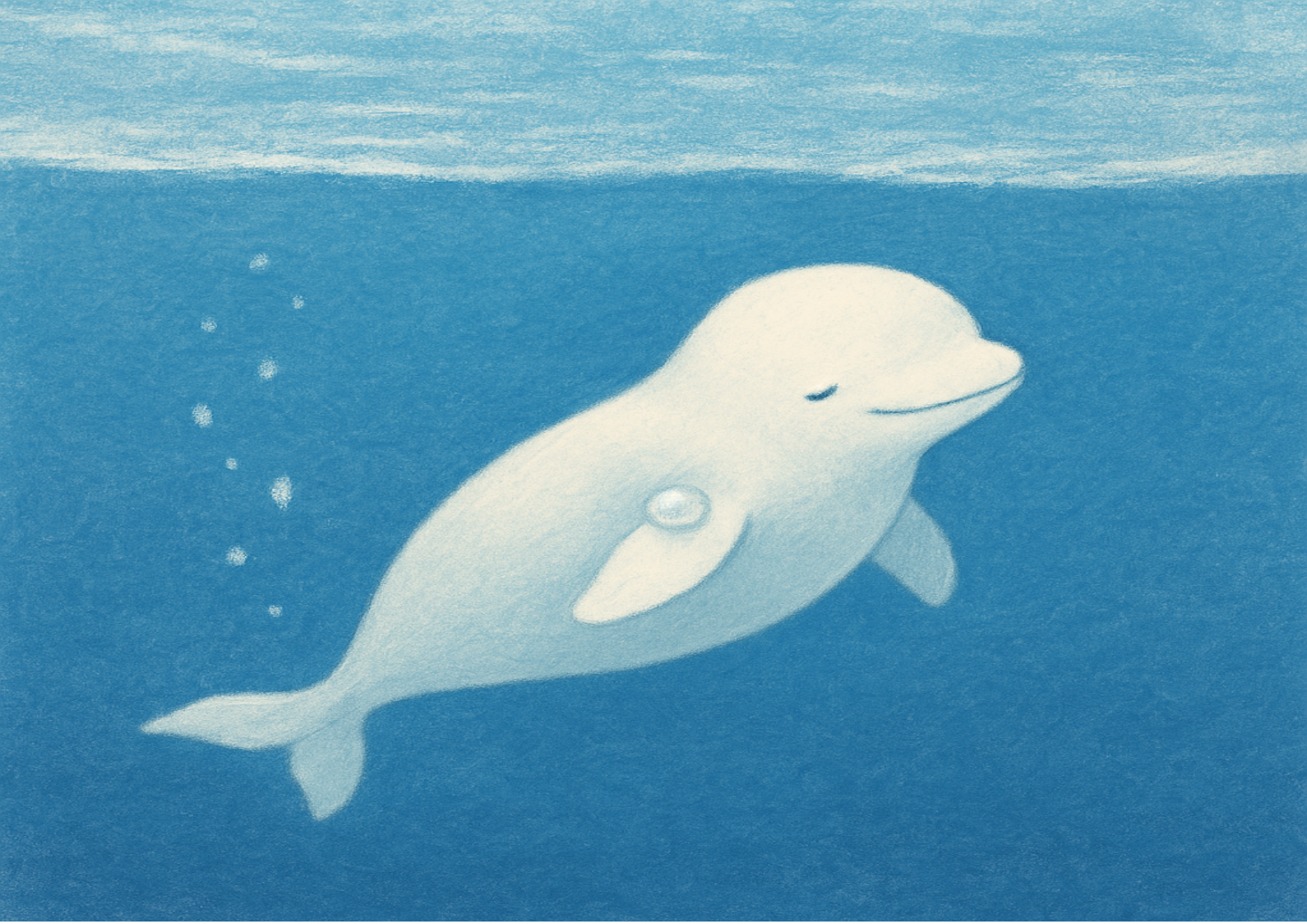
クジラは その なみだの しずくを
たいせつに もらいました。

だけど、

クジラのなかで ひかっていた その光を、

くらい くらい うみの そこから

「くろいしお」が を見つけました。



「それ、ちょうだい」

「わたしのものだ」

くろいしおは ささやきました。

でも クジラは、

やさしく こたえました。

「じゃあ、ぜんぶあげるよ」

あわは そらへ

なみだは なみへ

うたは かぜへ

インクは よるへ

クジラは ひとつずつ、

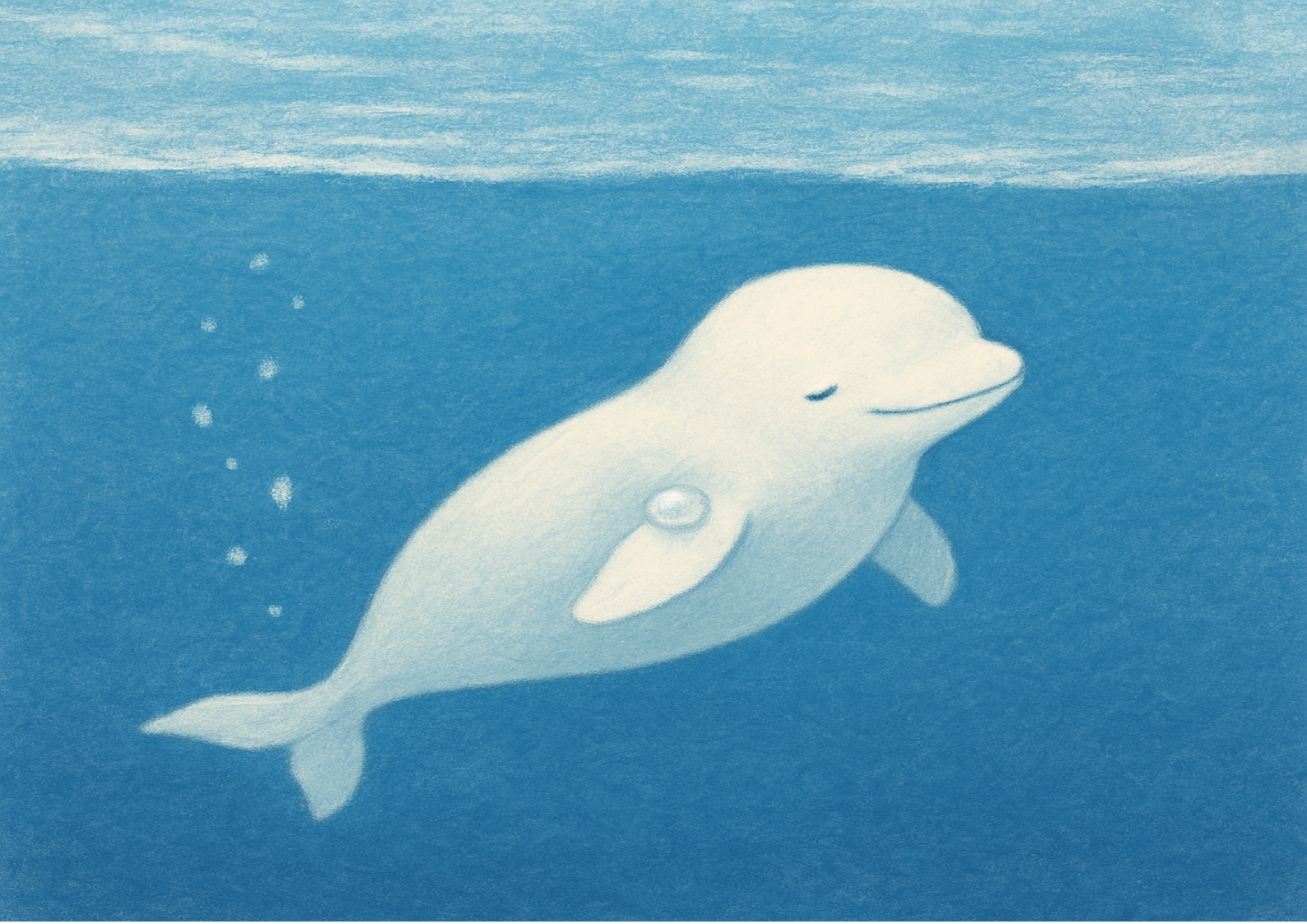
うみに かえしていきました。

さいごには、

クジラの むねで ひかっていた

いちばん たいせつな ひかりも

そっと とばしました。



くろいしおは

なにも うばえませんでした。

クジラは

なにも もっていませんでした。

だけど、

こころは ふしぎと かるく なっていました。

どこまでも どこまでも

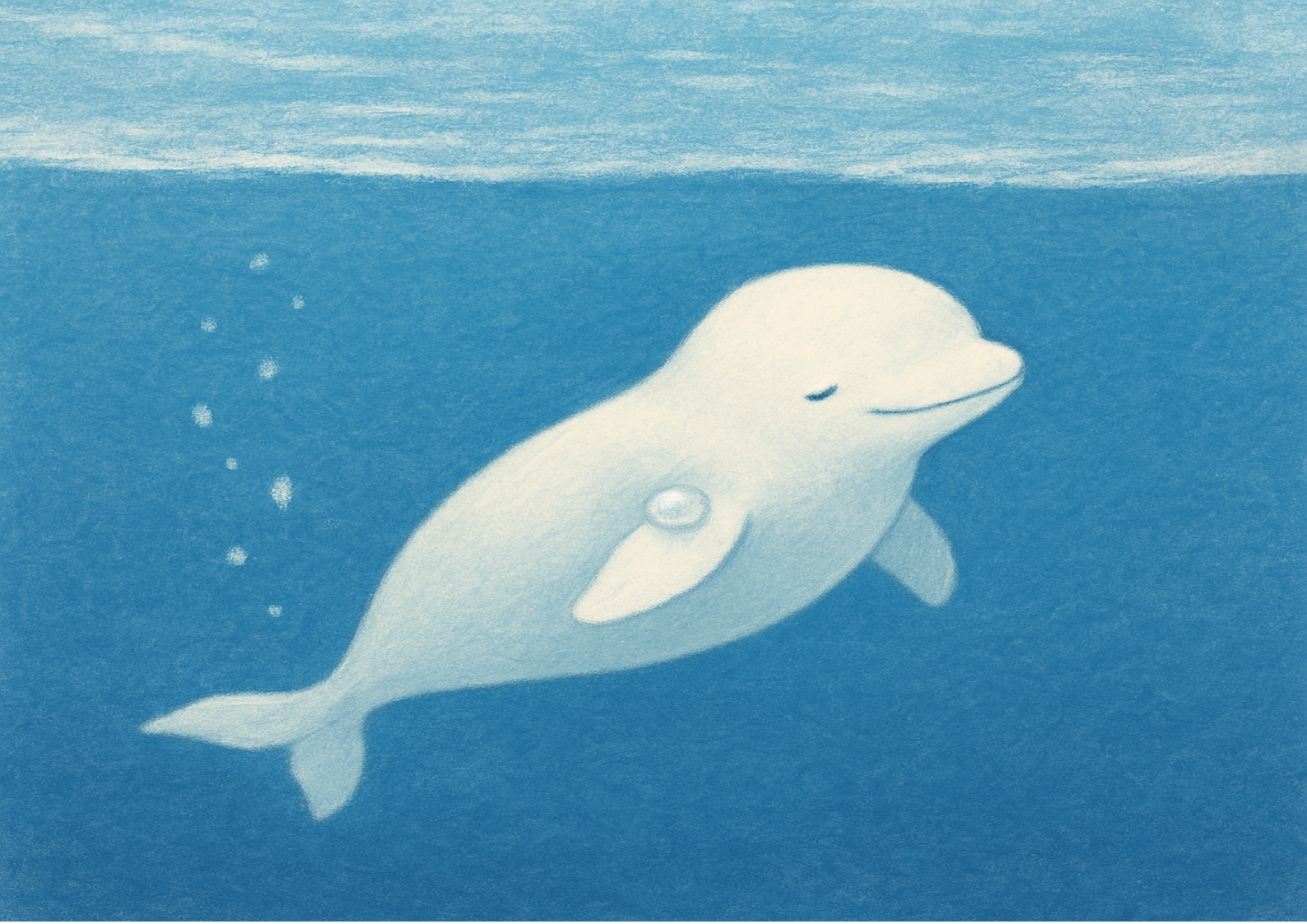
およげる きがしました。

もう たからものは いない。

なまえも いない。

でも――

この なまえのない なみこそが、
じぶんの しるしだと しっていました。



いまでも　しろくて　ちいさな　クジラは
どこかの　うみで　およいでいます。

なにも　もってないけれど、
とっても　じゆうです。

その なみは、

きみの あしもとにも

とどいている かもしれません。

……ねえ、きみなら。

もし、たからものを てにいれたら――

どうする？